

節分のころ「お化け」の風習

小松康子

大阪の下町で育った私は、節分の頃になると、通学路でもあった長い商店街を、懐かしくも幸せな気持ちで思い出す。

昭和20年代は、正月を新暦で祝う新正月と、旧暦、旧正月と言う意識が色濃く混在した。

節分は「季節を分ける」という意味で、立春、立夏、立秋、立冬それぞれの前日だが、中でも旧暦で新年の始まりと重なることが多い立春の前日を、意味するようになったらしい。

京都の伝統文化を研究する真下美弥子によると、「中世の陰陽道では、年越しの節分の夜は、1年中で陰から陽へと秩序が最も変わる日。このような境界性が高い日には、普段姿を隠している鬼や、妖怪も出現しやすい」と考えられていたので、京都を中心に、仮想で鬼の目をだまし、難を避けようと願う「お化け」と呼ばれる厄除けの行事が、町衆の間で行われていた。

庶民の「お化け」は、戦後の高度成長期ですたれ、祇園の芸妓衆などの一部の習わしへと、変わっていったと解説する。

そういえば私にも、節分の頃「お化け」の装いをして遊んだ、楽しい思い出を持っている。新正月が終わり節分に向けて、商店街の2軒の小間物屋の店先に「お化け」用品が並びだすと、下校の時が俄然楽しくなる。

藁の束に刺された色とりどりのつまみ細工の花かんざしは、それは綺麗で、学校帰りに友達とあっち、こっちと2軒の小間物屋を梯子して、見飽きなかった。

少し寄り道して家に帰ると、母が縫ってくれた銘仙の着物に着替える。その着物は、母の若い頃の着物を、いいとこどりにして縫い直したもので、黄色いモスの三尺帯を結ぶ。

おかつぱ頭のとっぺんに、日本髪のかつらをミニチュアにした髷をちょこんと付けて、つまみ細工とうすい金属製のピラピラがセットになっている、長めの花かんざしを正面にさして飾り、その横に小振りて房の付いた丸い花かんざしを挿すのを、自分で出来ないところは、母に手伝ってもらいながら仕上げた。

今、七五三の時に美容院で髪を結いあげ、かんざしを挿した女の子を見かけるが、あのように本格的なものではなく、もっと簡単に出来るようになっていた。

その頃の人気漫画の『あんみつ姫』のようになったことに満足して、火鉢の端で縫物をする母の横で、寒餅を焼いたり宿題をしたりと、夕食までの時間を過ごしていた。

幼い頃寒い冬の時期は、母が縫ってくれた着物で過ごすことが、多かったように思う。

いつも私の着る洋服、セーターや帽子、手袋、靴下に至るまで、手づくりしてくれた姉と、根気よく勉強を見てくれた兄。

父の布団の中で童話を読んでもらいながら、いつの間にか寝入ってしまった私を抱き上げて、布団の中へ移し替えてくれる父の腕を、遠く意識の中で、微かに感じていた記憶。

物のない時代も、精いっぱい愛情に包まれていた思い出が、節分の明るくなった陽射しと共に、蘇ってくるのである。



歳の豆遥か遠くへ来たものと
跋扈せし鬼も身の内節分会

康子
康子